

連携先世界遺産： 醍醐寺

醍醐寺の寺宝とご縁を結ぶ写仏用紙作成(おとな用・子ども用)

■ 受講生

森本 七海 (京都橘大学・文学部・3回生)、久場 利政 (立命館大学・経営学部・3回生)
石井 萌乃 (京都橘大学・文学部・2回生)、永福 采音 (京都橘大学・文学部・2回生)、木村 冨香 (京都橘大学・文学部・2回生)、小山 寛至 (京都橘大学・文学部・2回生)、森 香乃 (京都橘大学・文学部・2回生)、八木 智大 (京都橘大学・文学部・2回生)、山本 聖沙羅 (京都橘大学・文学部・2回生)

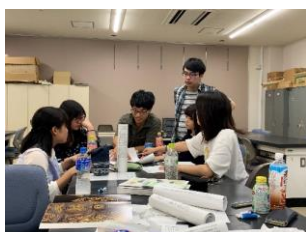
■ 担当教員・TA

小林 裕子 (京都橘大学・文学部・教授) ・ 田中 海成 (京都橘大学大学院・M2) ・ 藤村紘之 (京都橘大学大学院・M2)

活動目的・概要

目的: 本学オリジナルの醍醐寺写仏用紙作成

概要: 写経が經典を一文字一文字書き写すことで仏さまへの功德を積むことと同様に、仏さまの姿をなぞることで仏像一体一体を刻むかのような功德を積むための写仏用紙を作成しました。写仏の対象は彫刻ばかりでなく、絵画、書蹟も仏の姿をさまざまに具現したものとして含めようと我々は考えました。そして拝観者が写仏をするからには対象を深く理解してもらうべく、先行研究を辿り、歴史遺産学科学生ならではの解説文を用紙裏面に付すこととしました。こうした作業は、普段からおこなっている美術工芸品調査の技術を用いるものです。今回の活動を通じて、写仏用紙を活用する拝観者が醍醐寺の寺宝とご縁を結ぶお手伝いを実現し、さらには我々自身も醍醐寺をより身近に感じる契機とすべく、取り組みました。また、お寺さまにお力添えいただくにあたり、社会人としていかに行動すべきか学生一人一人が考える機会になったかと思えます。



◆ 主な活動(履修者全体に係るもののみ)

2019. 5. 12 全体オリエン・学科内打ち合わせ
2019. 5. 19 インタビュートレーニング
2019. 7. 07 醍醐寺での講義(執行仲田順英師)
下伽藍フィールドワーク(飯田俊海師)
2019. 10. 06 学内打ち合わせ
2019. 10. 20 プレゼントトレーニング
2019. 12. 01 学内作業
2019. 12. 07 学内作業

2019. 12. 12 成果発表会リハーサル
2019. 12. 15 成果発表会
2019. 12 醍醐寺様への報告(予定)
2019. 12. 22 上醍醐フィールドワーク(予定)

※ 自主活動については日数が多すぎるため割愛。

活動の成果

「おとな用」と「こども用」にわけての写仏用紙作成

企画案

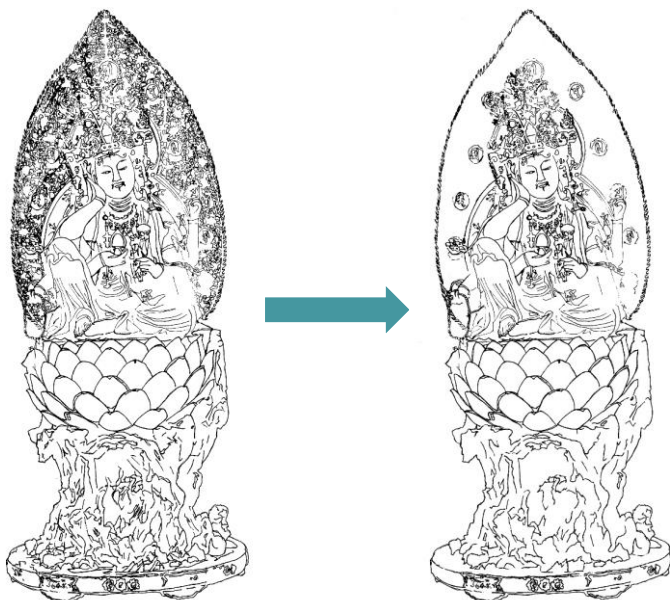
お写経がお経を一文字一文字書き写すことで功德を積むことと同様に、拝観の皆様が仏さまの姿を一本一本なぞることで仏像一体一体を刻むかのような功德を積む写仏用紙を作成します。これを世界遺産醍醐寺で実施することで、より深く醍醐寺を知り、多くのひとびとに自らが醍醐寺拝観によって何を得たのか心に刻んでもらうことができると考えます。昨今、写仏をテーマにした書籍が多く刊行され、さまざまな年代の人々が手軽に自宅などで写仏に向き合っています。しかし、歴史遺産学科に所属する我々としては、実際にお寺で仏さまの姿に拝し、つくられた背景や時代を理解したうえで写仏に取り組んでもらえたらと常々感じてきました。また彫刻ばかりでなく、絵画や書蹟もその対象とすべきかと思えます。昨年度は履修者が多いこともあわせ、建築、彫刻、絵画、書蹟の4グループに分かれて4種類の写仏用紙をつくりました。醍醐寺のご寺宝からグループ毎に描画材料を収集、このデータからかきおこし図を作成し、ラインを整えて写仏用紙として仕上げました。さらに用紙裏面には、先行研究をふまえた解説文を付すことにより、写仏をする方々が対象を理解しながら筆を進めることができるようにしたのです。今年度は、昨年度のものをベースに「おとな用」と「こども用」をつくりました。

活動成果

当学科では美術工芸品調査において、撮影やかきおこし図作成、法量計測、形状記述を通した報告書作成まで学びます。そこで、かきおこし図を写仏用紙に、報告書における概要執筆を解説文に、というように普段の学修を生かした活動をおこないました。

今年度は、快慶作の三宝院弥勒菩薩像、霊宝館に安置されている鎌倉時代の如意輪観音像、俵屋宗達筆の扇面散面図屏風などをテーマとしました。昨年と大きく異なる点は「おとな用」と「こども用」をつかったこと、扱いやすいパッケージデザインに変更したことです。

とくに苦心したのは「こども用」の解説で、小学生を想定して興味を抱きやすい文章にまとめてみました。そのうえで親戚の小学生に読んでもらう、試してもらうなど、理解を深めてもらうために工夫しました。



こども用写仏用紙をつくるには、いったんおとな用を書き上げてから、ラインを減らしていきます。簡単すぎても写仏の意義や楽しさを感じられないのではないかと、みんなで試行錯誤のうえ進めました。

活動を振り返って

永福采音（えいふく あやね 歴史遺産学科2回生）

活動は昨年度の反省点を知ることから始まりました。醍醐寺さまのご意見を中心に改善案を出し、より良い物にしようと話し合いを重ねました。パッケージの形はどうすれば折り曲がらないのか、写しやすい紙は何素材なのか、ただ写仏をするだけではなくご寺室について知ってもらうためには何を工夫すれば目に留まるのか。一つ一つ妥協することなく、こだわり抜いた物となりました。特に力を入れた点は、一般向けと、初心者・子供向けに対象を分けた点です。文化財について学んでいる私たちにはよくわかる言葉でも、他学部の学生や子供には全く伝わらない言葉があります。初心者・子供向けの解説文ではそのような言葉を分かりやすく言い換え、難しい印象とならないようにしました。この作業により、私たちにとっても、相手に合わせた伝え方を考える機会となりました。相手に合わせるということは、自分が理解したうえで、言葉を言い換える必要があります。どれだけその言葉を理解できているのかが重要となる、難しい作業でした。

今回の活動を通して、文化財の活用は課題が多く、取り扱いにも十分に注意しなければならないので、今以上の知識と技術を身に付ける必要があると感じました。中でもご寺室については、美術的、歴史的価値はもちろんのこと、長い歴史の中で受け継がれてきた想いを大切にしながら活用する難しさを感じました。苦勞した点は多くありますが、醍醐寺様、先生、そして先輩方のご協力のもと完成した写仏用紙です。多くの方に知っていただき、写仏に取り組んでいただきたいと思います。



担当教員からのコメント

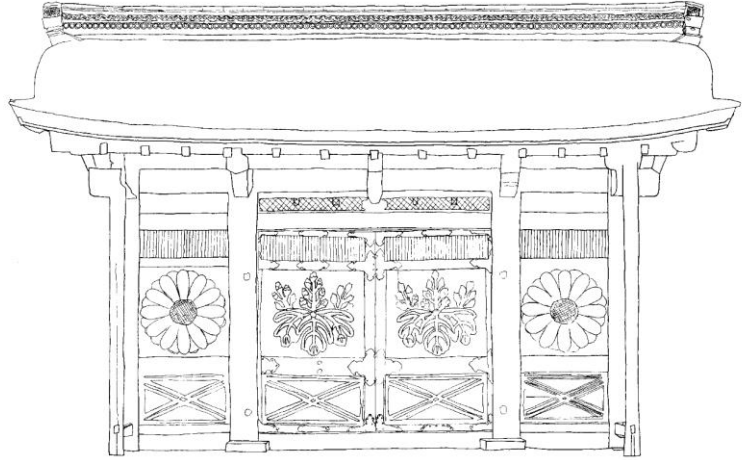
小林 裕子

毎年、世界遺産PBLにおいて醍醐寺様、インタビュー及びプレゼン講師の森先生、コンソーシアムの皆様、他多くの方々にお世話になりながら、貴重な経験を重ねております。とくに学生は、学外でいろいろな方と接することで将来社会で活躍していくにあたって何が重要なのか、肌で感じてもらったのではないかと思います。

PBLでは、実際に文化遺産を眼前にして得るもの、先学の成果から得るもの、これらをいかに拝観の皆様伝えるか、試行錯誤の末に写仏用紙作成というテーマにたどり着き、2年目となりました。昨年と同じテーマを選ぶことで、改良改善につとめ、より進化した成果物を完成するにいたりました。また「つくる、生む」ばかりでなく、実際に写仏をしてもらうことで新たな喜びをも得たでしょう。諸君が数年後、PBLを振り返った時にその意義深さに気付いてくれればと願うばかりです。

活動資料

写仏用紙途中経過



写仏用紙パッケージデザイン

世界遺産 PBL



世界遺産 PBL
醍醐寺×京都橘大学
大学コンソーシアム京都



世界遺産 PBL
醍醐寺×京都橘大学
大学コンソーシアム京都